



# 寒地土木研究所 技術者交流フォーラム in 小樽

## 新しい後志の地域づくりと公共空間整備

### 社会資本整備と地域の新たな取り組みを語る

国立研究開発法人土木研究所  
寒地土木研究所寒地技術推進室

技術者交流フォーラムは、寒地土木研究所が地域において求められる技術開発に関する情報交換、産学官の技術者交流及び連携等を図る目的で、平成20年度から北海道内各地で開催し今回で23回目を迎えます。

今回の技術者交流フォーラムは、「新しい後志の地域づくりと公共空間整備」をテーマに社会資本整備と地域の新たな取り組みなどについて語り合うもので、2015年8月25日、小樽市において開催しました。地元企業、官公庁等から123名の参加がありました。本稿は、講演後に行われたパネルディスカッションをご紹介します。

#### パネルディスカッション

##### 社会資本整備と地域の新たな取り組みを語る

##### 社会資本の機能と景観への配慮

**宮武** まず、マッサン以降における広域的観光に関するコメントをお願いします。

**小川原** 景観、文化における集客では後志にも多数の産業遺産があります。それを土木遺産と意識するにとどまらず小樽運河観光として発進したことに現在の繁栄があります。もう少し、自分たちの町のありよう、形について外部に自信をもって発信していくソフトがないと小樽観光は衰退していくとの思いでいます。新



パネリスト  
小川原 格 氏  
観光庁観光カリスマ

幹線開通では、道内から出ていく人のことを考えていない課題があり、駅からの二次交通<sup>※</sup>整備などを周到に用意する気持ちが必要です。観光は地域産業全体に乗っかっているものであり、何かがまずくなると落ち込むことが歴然としており、成熟した観光を望むならば着実に身の丈にあった施策を行う必要があります。二次交通整備には、防災等の面からも検討し、技術者だけでなく住民へも訴えていき、検討する必要があります。

**宮武** アメリカ経験の長い伊藤さんにもアメリカと余市、小樽を比べたご意見をうかがいたい。

※ 二次交通  
空港や鉄道の駅から観光目的地までの交通のこと。



パネリスト  
伊藤 二郎 氏  
余市観光協会マネージャー

**伊藤** ニューヨークは北海道と似た四季や美しい環境、景観ですが、看板、標識等がない道路が多く、観光地化を意識しなくとも良好な景観が継続して形成されていることがうらやましかった。

**宮武** シーニックバイウエイの調査でアメリカへ行ったが、当たり前きれいな道があり、日本とは出発点

が異なるとの印象を受けました。

**松田** 北海道は世界でも有数な積雪寒冷地で都市間距離も長く、これに起因する安全対策が必要となります。しかし、日本の土木整備の欠点として単一目的主義で、全体として最適設計になっていない、すなわち施設整備による弊害の意識が不足しているとの意見もあります。ノルウェーの視線誘導標などは丸太を立てただけのものがあります。機能の点で不満もあるが、道路利用者の理解の上、行っていると思います。景観は市民の意識と理解も重要であり、技術者も景観配慮の重要性について発進していく必要があります。

**伊藤** 常に思うのは安全第一ばかりが重視されるが他のプラスアルファを検討できないものか、もう一つ二つの視点で総合的な検討ができなかったのかと感じます。

**松田** 機能と景観はトレードオフの関係にあると思われる方もいるかもしれませんが、決して両立しないわけでない。人間は機能的に良いものは心地よく感じる傾向があり、必要なものを適切に整備することで両立させている事例もあります。

#### 知識探求型観光と情報発信

**宮武** ニッカも現役の産業遺産ともいえるが、産業聖地における炭鉱に関するご意見をうかがいたい。

**伊藤** 父親が芦別市におり炭鉱の話は小さいときから聞かされ、空知の遺産に観光としての目を向けるのを興味深く見守っていました。ただ、どこまで一般性を持つのか心配です。

**小川原** まだまだ周辺への認知が進んでいない現状にはあります。ただこのようなジャンルが日本国内には

まだないが、海外には、多々あります。小樽運河、ニッカなど現在稼働している産業遺産もあればこのような過去の産業遺産も混在しています。その中でどのように観光ツーリズムとして開発していくかが、これからの挑戦課題です。知識探究型観光では、十分な知識がないと逆襲される恐れもある時代ですが、地域の人たちが知識を語れるような視点で国家も支援してほしい。



コーディネーター  
宮武 清志 氏  
札幌国際大学観光学部  
国際観光学科 教授

**宮武** このような知識探究型ツーリズムでは多人数の参加者を受け入れるものではなく、少人数での対応を考えていると思います。古い建物の場合受け入れの対応に問題はないのでしょうか。

**小川原** 本当に危なく壊すとした歴史的建造物もあれば、そうでないものも多くありました。合理的に考えていくほかない。また、世界遺産の軍艦島（長崎県）では、危険性を知り尽くしたガイドがコントロールしていましたが、世界遺産に認定されてから理解の不十分なガイドが入り込まないか、今後の安全性が気が掛かります。官民合同で運営を検討すべきものと考えます。ただ、夕張市の石炭の歴史村では、鉱山の中まで入れる安全に制御された運営を行っており、悲観してはいません。

**松田** エリア観光としての競争力をつけるために、様々な連携がなされていると思います。多くの情報が発信されている中で、連携した提案型の発信はどのようにされていますか。

**伊藤** 観光協会としても各地点での情報発信を面に結びつけ発信されることで、広域観光として理想的な流れになると思います。現在はスマホによって観光者が情報発信をしていく時代であり、そこはゆだねるということで、情報発信が自然と進んでいくと思います。情報発信では、行政は平等主義の意識が強いが、頑張っているところにはそれに応じた施策を重点的に行うことで、もっと効果が上がると考えます。

**宮武** 台湾での経験で、おすすめコースが必ず問われ

ました。初心者のためにもセットメニューの情報提供も必要かと思えます。

**公共空間は技術の成果、北海道開発そのもの**

**宮武** 後志についての公共空間についての課題、改善点についてお聞きします。

**伊藤** 余市町の道の駅は残念な状態にあるが、民間、行政、技術者が核となる美しい空間を作るためには、どこがどのように頑張ったらよいのでしょうか。

**松田** 難しい問題ですが、海外の事例にこだわることなく、北海道のすばらしい素材に住民が気が付くことが必要です。また、景観など公共空間の質が向上したり、悪化するとどのような効果や問題があるのか評価をしていく技術開発や、合意形成を行うためにも、価値の共有が必要となります。



パネリスト  
**松田 泰明**  
寒地土木研究所  
地域景観ユニット  
総括主任研究員

**小川原** 行政の計画などでは海外事例などを目標に示すことが多いが、これらは地域の努力の積み重ねで形成されたものです。広域連携といっても、隣の町と連携すらしていない事例があります。広域になるほど近隣町村との人間同士のネットワークを築くことをハード整備の前提として行う必要があり、予算的にも人的にも重点的に配慮する必要があります。

**宮武** 観光も景観も一つのセクターの頑張りだけでなく、人と人や学際的なイノベーションが重要。

**松田** 公共空間も単なる姿・形のみでなく、どう使われるか、ひいては地域の遺産となれるようなものをつくることも大切で、旭橋のように貧しい時期に先人が築いた例からもその意義を理解し、それを実現する技(技術)を手に入れることが必要と考えます。

**宮武** 旭橋の例など1930年代に良好な施設が集中しているが、設計者の名前が出ています。建築では当たり前ですが、土木もこのように名を残すような意識も必要かと思えます。ロサンゼルスディズニーランドは創業者にとって失敗だったそうです。これは周辺の乱開発に起因するもので、彼はフロリダにディズニ-

ワールドを作り、自由で余裕のある施設を築いたといわれています。北海道でドライブ観光に人気があるのは、路肩余裕幅を道路に付属させることで景観を改善し、夏季に広く余裕のある、サイクリングにも使える施設となっているためです。このようなちょっとした工夫が重要なポイントだと思います。最後に土木技術者に対するコメントをお願いいたします。

**小川原** どのようなものを作ってきたのか、もっと一般市民に発信してもらいたい。それこそが町、地域の誇りになりうるものと考えます。小樽市の奥沢水源地は、当時の市民の誇りでした。このような住民の誇りを再確認し、発信してもらいたい。

**伊藤** 映像編集技術の進歩が表現の幅を広げて評価を高めています。土木技術でも新しい技術によってより良いものが作られているものと思いますが、一般人には技術が見えず、何が行われているかがわからない。発信力を高めPRしてほしい。

**松田** 現在、富士山の世界遺産として求められている保全対策や、鎌倉や平泉の審査でも課題となったものに、土木、建築、都市計画における景観等への配慮不足に起因している点もあります。本来インフラ整備は地域や人を幸せにする目的で整備されるものです。

単一目的主義に陥ることなく、最適設計を目指して、全体の中でいろいろな手段を検討していくことが必要だと考えます。

**宮武** もともと観光は国の光を見せる、それが最高のもてなしといわれています。産業遺産、公共空間は技術の成果であり、北海道の開発そのものでもあります。これらを大切に次世代に伝える、さらには自分の作品を残すなどの気持ちで住む人の誇りとなし、観光資源ともなるものと思います。

